

NO.175

# 全 仏

3 / 47



(彼岸参詣で賑わう四天王寺参道)

財団法人 全日本仏教会

# 彼岸会を生かすには

東洋大学教授 金岡秀友



今年もまた彼岸会が近づくとつれて、彼岸についての話しや催しを耳にする。本誌でも

彼岸会についての小文を筆者に付けてこられたが、彼岸会の意義や歴史については、もう改めて繰り返す必要もないほど出尽くしていると思われるので、ここでは、彼岸会をはじめとして出来上がっている、今の仏寺の檀信徒の接し方について、他の宗教と比較しながら、それが充分なものであるかどうかを考えてみよう。

「盆・暮・両彼岸」といわれるように、春秋の二度の彼岸会は、盆および暮と並んで、寺と檀信徒の接する重要な時期である。宗派や地方によつては、暮と共にあるいは暮よりも正月の方に、より密切な接触のあるところもあるから、盆・暮・正月・両彼岸は檀信徒と寺とのもっとも重要な交流の時期ということになる。

いまここで寺というのは、いうまでもなく且那寺・菩提寺と、その檀信徒の関係の上に立っている寺のことである。

このような寺にあって、盆・暮（正月）と二度の彼岸だけが檀家に接する唯一の機会ではない。まず、年忌・法要によつて檀家と寺の接触があり、さらに、葬儀をめぐる通夜・告別・念仏などの機会もある。

寺にとつて、葬儀・法要は日常的なことであるからこれもまた、先の盆・暮・両彼岸と並んで檀信徒との日常的な接触の一つに数えるかも知れないが、檀信徒の側では、葬式はもちろん法要といえども決して恒常的な接触ではない。葬式は十年十数年に一度もないであらうし、法要とて毎年はないであらう。親戚の法事・葬式に連なる機会はあるにせよ、菩提寺にまいる機会としてみれば、やはり、これをもって継続的な接触ということではできないであらう。

真宗の月まいりや、他宗でもそれに類する習慣のある寺は別であるし、信徒寺として、加持祈祷などで頻りに接触をもつ寺などは、今の場合除いておき、ここでは、全国津々浦々の、ごく普通の、いわゆる無常寺にかぎって見ることにすると、檀徒との接触で継続的なものは、やはり、盆・暮・両彼岸ということになつてくるといわなくてはならないようである。

さて、この彼岸会で、檀徒と寺がどのように接触しているかを見てみよう。

この行事は、彼岸会とはいわれているものの、法会や説法が行なわれる寺は極めて稀で、ほとんどの場合檀徒が寺に参り、墓参し、寺に立ち寄つて、いわゆる「付け届け」の挨拶をする七日間となっている。この点は暮、あるいは正月の行事とよく似ており、寺側から檀徒の方へ棚経し、施餓鬼の法要などを営む盆の行事と大きく異なっている。もちろん、盆の時期には、彼岸や暮以上に檀徒の方も寺へ参るのであるから、いま盆を寺と檀徒の相互交流といえるとするれば、彼岸や暮は、檀家から寺への一方交通であるといわなくてはなるまい。

ここにまず、一つの問題がおこる。このような一方的な檀家からの寺への交通が、今のままで果してどこまで維持できるであらうかという点がそれである。

もちろん、いかに若い、合理主義的な若い世代が檀家の主たる層となろうとも、祖先崇拜や近親の追憶に基づく墓参は絶えるはずはない。しかし墓参が墓参だけで終わり、寺へ立ち寄り、法話を聞くこともせず、本堂へ参ることもなく去つて行くひとびとが増えたとき、寺はもはや仏寺ではなく、単なる墓地管理所になつてしまふのではなからうか。政府の寺院に対する取り扱いかいの中には、すでにその態度が見えている。銭湯や床屋と並んで、寺を環境衛生の面だけで監督・管理する政府の態度は、寺社奉行的伝統が、近時の寺院活動の不活発と並んで息を吹き返してきたような感じがする。

南方の仏教徒には、日本の仏教徒が単なる祖先崇拜の便宜として仏教を借りていると見ている向きも少くなく、イギリス軍は、前大戦で日本軍と交戦中、ビルマの民衆にその点を極力宣伝し、日本とビルマのひとびとが仏教によつて同和感をもつことにくさびをうちこんでいた（会田雄二『アローン収容所』）。それは

もちろん、戦時の謀略といえるものもあったにせよ、それを妨げる材料を日本仏教がもちえなかつたこともまた、残念ながら事実だったのである。

寺に立ちよらぬ檀家の増加は、檀家への布教の機会を寺に失なわせるだけでなく、寺の経済的基礎をもちやうとする。財施は法施とつねに見合いつつ増減するものであるから、寺への失望は、寺の失望という結果を産むはずである。これでいいのであろうか。

### 三

彼岸での説法・法要が充分でないとするれば、益・善はどうかという問題が次におころう。これは今回の小論のさしあたっての課題ではないので、これ以上立ち入りようがないが、決して充分ということはできない。

さらに、二月十五日のねはん会、四月八日の降誕会十二月八日の成道会など、仏教の三大会で、法要・法話を行ない、それに檀徒のかなりな数が参加している寺院がどれだけあるであろうか。

このように見えてくると、ひとり彼岸会だけに限らず無常寺における檀徒との接触を恒久的に約束する行事として、いったいいま回があるだろうか、ということに深い疑問と危懼が湧いてくる。

アメリカの宗教学者オルポートは、幼時から少年時にかけての宗教的経験が、たとえ、意にそまぬ、あるいは意に反した習慣的・強制的なものであったにせよその蓄積の上のみ成年期の宗教、みずからえらびとった宗教が花開くのだといっている(『個人の宗教』)。

幼時の宗教を否定して別の宗教に赴くにせよ、否定して無神論にまで行くにせよ、あるいは逆に、肯定・確認して幼時の宗教を改めて、自己のものとするにせよ、幼時の宗教的経験のないものは、この三つのどの方向においても、真に自分の意見を語りうるものではない。

日本人が欧米人のように、安息日の考えをもたず、したがって、日曜日に教会へ参る習慣がないからといって、もちろん、いちがいに日本人は無宗教であるときめつけることはできない。行雲流水に無常を觀じ、床の間の一輪の花に自然と人の調和を見るのも日本人の宗教ということではできる。そのことは私も充分に認め、そのように書きも語りもしながら、なおかつ、オルポートの指摘のもつ真実性をみとめないわけにはいかない。

今日の宗教書のブームが宗教の転機に直結しない秘密の一つがここにある。仏教学で有名な高田大家について、特別な知識なしに接した財界人や出版人たちが、ひそかに「あの先生に信仰はあるのですか」とか「あの先生の信仰はどのようなものですか」という率直な疑問を表白することがあるのも、同じ理由によっている。この質問が在俗の仏教学者に対して向けられるだけでなく、時として寺門の仏教学者に対しても向けられることがあるところに大きな問題がある。それはただ、仏教と仏教学のへだたりといつてすまずことはできないような、もっと根本的な問題といわなくてはならない。成人に達して、教養や興味で仏教を知り、あるいは仏教学を専門とするようになっただけでは、無意味ではないにせよ、決して充分とはいえないはずだからである。

### 四

キリスト教の日曜礼拝は、年五十回を超える信徒との継続的接触の道を開いている。しかし、事実は信徒の礼拝は欧米においても年と共に低下し、今では十パーセントを割り、教パーセントに落ちこんでいるところさえあるという。そうとすれば、信徒の側より見れば、年せいせい五回どまりの接触しかないこととなり仏教との大きなちがいはなくなってしまう。

しかし、他もよくないことが、こちらの良いことの理由にはならない。いえることは、やはり、宗教一般が現在危機に陥っているということであろう。

私は、仏教を抜きにしての仏教論を決して完全なものと考えすることはできない。仏教学は正しい仏教を知る基礎として、参禅のひとの増加は正しい仏教修行の階程として、いずれも不可欠のものである。しかし、定と慧だけで、仏教徒の正しい生活法を知らなくしてどうして完全な仏教に入ることができようか。この正しい仏教的生活法こそ、広い意味における、したがって近代的意味での戒であり、この戒を守り、教える場所こそ、サンガであるはずである。

今日と将来の戒の正しい姿を予知することはむずかしい。今の日本の仏教にもっとも欠けているものは戒であり、各宗本山とも、これについてはほとんど黙して語らない。しかし、戒とは決して本来そのようにむずかしいものでなく、ことに大乘戒においては、きわめてのびやかな、心の持ち方、正しいものの考え方(撰善法戒のごとく)を考えている。山岡鉄丹居士は、家人に禅定はむずかしくとも、戒は学びやすく守りやすいとして、近くの釈雲照律師への入門をすすめたという(平井玄恭師の教示による)。

春秋の彼岸は、季節毎の行事として、週ごとの日曜礼拝にくらべて、いかにも関連な、迂遠な布教の機会と思われるかもしれない。しかし、仏教的雰囲気という点では、他のいかなる行事よりもめづまれている。極端をいとい、逆説を避け、自然の中に自己否定を重ねつつ、しかも自然に回帰することを目標とした仏教は、全体としては正に彼岸会の宗教である。

年わずか二度の行事ではあるが、この機会をより生かし、できればここから始まる、寺と檀家との日常的な接触がおこる方法を、全国の寺院の方々と共に考え実践して行きたいものである。

# まぼろしのカピラ城を訪ねて

日蓮宗インドネパール  
聖地特別巡拝団  
松井大周

唯一不明の仏跡、カピラ城の解明をめざし、立正大学がネパール政府と共同発掘調査をつづけているが、本年が五カ年契約の最終年度にあたるので、この派遣隊員の慰問激励と宗門の委嘱を受けた現況調査、およびネパール政府への表敬謝礼という特別の使命を抱いて、十八名の仏跡巡拝団が、去る一月十三日羽田を旅立った。

## 仏骨壺の礼拝 難民の慰問

十四日朝、カルカッタ博物館で秘蔵の仏骨壺を礼拝して厳肅な第一印象を得た。これは一八九八年英人ベツペ氏がピブラワで発掘した釈迦族奉祀の銘ある貴重な靈宝である。昨年、私はトラックで悪路を乗り切り、命がけでピブラワの現場をたずねたが、とてもバス、タクシーでは行かれない。今日は仏骨壺が収めてあった大石函も拝見出来た。次に大菩提会を訪れ、孤児、難民へと見舞金と乳製品を贈り、同会の仏跡格護と社会福祉の法勞を讃えた。

午後三時半、空路アショカ王の都バト



ナに着き、博物館王宮趾を覗て七時半バスでラジキールのゲストハウスに投宿。

## 靈鷲山の来迎 ヒンズー祭典

朝霞に浮ぶ説法跡に法華虚空会の実感を味わう。暁天に靈鷲山に詣で神秘の旭光をおがみ、日本山の大仏舍利塔は多宝山の頂に聳えて、独り日本仏教の西漸に

気を吐いている。登頂のリフトはインド唯一のものといわれ、まことに快適で、折から今日はヒンズー教の祭日で善男善女で大繁昌である。王舎城温泉広場は人と露店で埋まり、見世物小屋のラツパがなる。せまい浴槽に二十数人がもみあい番人が竿で湯をたたく、文字通り熱狂的な沐浴は凄じい宗教行事である。

## 美しいガヤの万灯

竹林精舎の池を廻り、ナーランダ大学趾に玄奘三蔵の留学を偲び、夕暮フダガヤの日本寺に着く。日本料理に旅の疲れもとれた思いで、まさに日本寺建設の功德を文字通り味わった。本堂の上棟も近いようで、日本仏教徒も肩身が広い。暁天に大塔に詣で、菩提樹下の金剛宝座に額をあて冥目して心耳を澄すと、咫尺に坐し玉う仏陀の声咳がきこえるようだ。印象的なのはチベット僧のともす三千近い灯明で、私たちの御灯明料が継ぎ足している椰子油となっているのだらう。初めての夜汽車でベナレスへ向う。

## 古都ベナレス 鹿野苑

早暁、ガンジスの沐浴を船から眺め、朝詣りのヒンズー黄金寺へゆく。全仏から贈られたカラフルな仏旗と、紫に白く染め抜いた団旗が、人と車と牛の大雑沓をゆく目印となっている。初転法輪の聖地サルナト鹿野苑に詣で、アショカ王の獅子柱頭等第一級の傑作を覗て、夜行ゴラクプールへ。

## 涅槃堂から純陀の邸へ

駅食堂で朝食後、バスでクシナガラに着く。緑の樹林の中に真白い涅槃堂がめざめるように映え、野猿が数匹頭上にあそび、芝生にこぼれている沙羅の葉を記念に拾う。頭北面西の寢像の大きなまなざしは、西の方カピラのふるさとを眺め玉うにちがいない。

六年前の記憶をたより、カシヤの町を抜け最後の供養者純陀の村へ向う。東北約二十キロもあるうか、村人の案内で計らずも純陀の邸趾を見ることが出来た。インド政府はここを純陀公園として開発するために七万ドルを投じているという。田舎に似合わない直線の道路もそのせいとみえる。小丘を囲んで巨木が枝を長く垂れ、由緒ありげな面影がある。四月末月明の下で行政官がきて祈願祭を行なうとか。珍客というので、そばのパワリインターカレッヂの庭で、校長外多勢の大歓迎を受け、熱い紅茶を頂いた。仏陀最後の供養者純陀村の人たちから遠来の吾々がまた思わぬ供養を受けてすっかり感激した。仏跡巡拝の人はぜひこの仏跡を訪ねてほしいと懇望された。

## ルンビニーからカピラ城現地へ

ノーガルからバスでルンビニー生誕地に着く。国連の開発計画が近づいたのかアショカ王柱と池とが鉄条網で保護されている。日本では宗祖の誕生地が大本山として栄えているのに、肝心の教主釈尊の聖誕の地が、花もない茫々の草原では

花祭の稚児に合わず顔がない。早く日本の協力で大聖地公園となる日を願いつつまた、インド領に戻り、シヨハラットガール駅からバスで二時間、再び途中国境を越えてタウリハワ町に着き、悪路のためトラックに乗替え、十九日午後四時半めざすカピラ城趾、チラウラコットのキャンプに辿り着いた。マンゴウの林の下に赤黄のハデなテントが七張り、ひげ面の隊員が元気で出迎えた。持参した米、菓子、惣菜、薬品、衣料、見舞金などを贈って耐乏生活の労苦をねぎらい、宗門の興望を伝えた。夜気は冷たく、おそくまで焚火のそばがはなれられぬ。

シヤカ風俗の人形 豪族の印章

朝食後、仏教、地理、考古の担当者から発掘調査の報告を受けてから数百米先の現地へ赴く。三人の隊員の指揮で、七十人の人夫が掘さく、土砂の運搬、出土品の洗滌をしている。その傍らに祭壇をしつらえて、マンタラを掛け縮緬を張り御幣を吊し続経加持して事業の成功を祈り、出土人骨の壺を吊した。五十日の間に、紀元前数百年の土器と多くの土人形その一個は釈迦族特有の服装をしたものさらにアショカ銀貨など、いずれも二メートル下の釈尊時代の層から出た。また期待のスタンプが一つ、四つの文字は唯今解明中であるが、これが釈迦族のものであればキメ手となるのである。四門出遊を想い浮べながら周囲を一巡した。午後は半袖の軽装で、東北八キロ、浄飯王

離宮趾と伝えるニグリハワの池の堤に横たわる、クナゴン仏のアショカ王柱を見に行った。途中牛車を雇って四時間、帰途半ばで日が暮れて寒さにふるえながら猿の鳴き交う森に帰着いた。

祇園精舎よりタジマハールへ

二泊。いずれカピラ城確定の暁には大挙して、またこの森を訪ねようと、名残りを惜しみつつ十時半チラウラコットを後にした。

この夜はバルランプールの豪壮なゲストハウスに泊り、翌朝ゆつくりと祇園精舎、舎衛城趾を訪ね、ゴンダより夜行でラクノーに着、終日市内を巡り、再び夜行で二十四日朝アグラで長い汽車の旅を終る。まず、救ライセンターを慰問して、タジマハールを見学、印バ戦争ではこの付近に空爆をうけ、巨大なタジマハールを黒いベールで覆うたという。

リバブリックデー（共和国記念日）

夕景、ガンダーラと妍をきそうマワールの仏像をみて、前夜祭のニューデーリに入る。二十六日。リバブリックデーの大パレードを中央観覧席でながめた。今年印巴戦争の意気上り、軍事色濃厚とかで、手を挙げて左右百万の観衆にこたえつつ疾駆したガンジー首相の白衣の晴姿が印象にのこった。

ネパール首相訪問

二十七日。空路カトマンズに着き、王

宮前の宿舎アンナプルナに入る。まもなくルンビニー開発委員会支部長が来訪し吾が宗門の協力を要請した。政庁を訪問し、両陛下の大きな写真が掲げられた謁見室にて、一時間キルティニーデー首相と会見した。四時から議会を控え、さらに風邪を押して遠来の使節を歓迎されたと聞いて一同その誠意に感動した。まず五六年の共同発掘について、立正大学へのネパール王室および政府の理解ある好意を謝し、総長よりの日英両文の感謝状と敦をうつ王朝風少女の日本人形を首相を通じて陛下に献上し、大学理事長よりの観音像を首相に贈呈した。キ首相は仏跡の発掘作業と本日の来訪を謝し、この二つの美しい贈物は永く両国の親善友好の記念となりましようとお申された。つぎに発掘事業に対する見解とその見通しについて、首相の所信をただしたところ、語勢強く、「吾々は発掘以前よりこのチラウラコットこそストータナ（浄飯王）の居城であると堅く信じている。今もここを掘ってカピラ城はないので、あなた方のご努力を望みたい」と断言されたのは嬉しかった。直屬の考古学局を持つ首相の確信をきいて、明るい希望と自信を得たことは望外の収穫であった。さらに首相は繰り返しルンビニーの開発援助を要請されたのを見て、日本への期待の並々ならぬものを感じた。

マヘンドラ国王の薨去

翌日よりヒマラヤ山中の最勝地ポカ



ラに向い、心ゆくまで大雪山の眺望を堪能し、三十一日正午、国王重態のニュースに驚きつつネパールを後にバンコクに向った。翌朝刊で国王薨去を知って心より哀悼の念を深くした。後日の通信によると、政府は直ちに五日間の昭喪を国民に告げ、首相以下使丁に至る政府の全役人は髪を切って丸坊主となり、政府も商店も扉を下し、道ゆく人もなく死の街と化したという。私たちはわずか三日の差で首相と会見し、マヘンドラ国王陛下へ最後のプレゼントとして美しい日本人形と感謝状とを差し上げることが出来たことを、まさに仏天の冥護として感謝せずにはおられなかった。かくて横井さわぎの二日夜無事羽田に帰着した。

# タイ国雑感

岡本 肇

現在、私はセイロンのコロンポ市にて単身で社会事業の視察を行なっているが先般タイ国バンコク市で開催された国際仏青会議に出席したので、その全体的な感想と、半月間ほど国立施設に泊り込んで恵まれない子どもたちと肌で接した感想を、報告したいと思います。

十二月中旬ともなれば、富士山は白雪をかぶり、北陸や北海道も白い世界に つつまれるが、タイ国は一応季節は冬季であるが、寒いわけではなく暑い冬季である。私は十二月十日に日本を出発して他の日本の代表団よりも一足先にタイ国へ入国し、国連とタイ国厚生省のはからいで二つの国立施設で研修する機会が与えられた。日本でいう社会福祉事業分野の養護施設である。タイ国の生活は仏教的習慣が非常に強いことは日本を窺つ前より聞いていたが、実際に子どもたちが養育、教育されていく上で、どのように仏教教育がなされるであろうか、という視点に立ってのタイ国での私の生活が始まった。

町には至るところにきらびやかな寺々が立並び、路上には黄色の衣を身につけた多くの僧が托鉢をしているのに出会う。聞くところによると、ひと昔前までは、男子は一度は必ず僧堂の生活を送ら

ねばならなかったようであるが、現在では一家に一人僧堂に入れば良いそうである。国民は総て仏法僧を敬い、王をたてまつって日常の生活を送っている。タイ国で王様の悪口でも言おうものなら殺されそうである。日常作法も合掌で始まり合掌で終わる。よく徹底したものだと思せずにはおられない。

古くからの伝統が築き上げた文化を、するどく守ろうとする国家権力も、この国にいとまぎまぎと見せつけられる。映画に例を見ると、子どもが親に反抗する場面や生徒が先生に反抗する場面など日本なら簡単に映倫をパスするような場面もするどくカットされていくのである。また、米国や日本のようにヒッピーやロングヘアーの青年たちも無論見られないましてや今は戒厳令下、よろしくない者が出ればすぐに銃殺である。あざやかなタッチで権力が描き出されている。しかし、それに反抗しようとしている分子もいないわけではない。一例として戒厳令下、ある大学生がラマ通りの記念塔に「タイの民主主義は終わった」と大きな表示板をかけた、抗議を行なうというようなことが起った。このような風景もだんだんと見られるようになったという。戒厳令下、じわじわと押よせる新しい波にあなたも剣をもった権力がこれを打ちくだこうとしているような感じを受けたことは、バンコクにきている世界の人々の中で私だけであつたらうか。

一方、子どもの養育の問題については

私の施設での体験であるが、日本の施設との大きな違いは、日本ならば現在の児童福祉法では必ず保母さんがいて、一人で八名までを受けもつことが出来るようになってきている。これは最低基準であつてこれ以上になると子どもへ母親としての目が行きとどかなくなり、愛にうえた子どもたちに大事な愛が与えられなくなる恐れがあるからである。しかし、タイ国ではそれが無い。若い男性が一人で二十名からの子どもを受けもっているのである。保母ならぬ保父である。自然子どもたちは、たとえ小学校一年生であろうと自分自身のまわりをやらなくてはいけない仕組になっている。これはやはり小乗的な仏教の生活習慣なのである。自然子どもたちは幼い頃から自己中心的なキャンパスの中で育っていくのである。しかし、一見子どもたちの日常生活は雑草の如くにみえるが、仏への敬愛の念は日本の子どもたちよりはるかに上まわっているように感じられる。このようにタイ国では小乗仏教を背景とした仏教生活習慣が強くしみわたっており、十二月二十日より開かれた国際仏青会議にも、多数の地元大学生が出席し、活発な論議が展開されたのが注目された。

国際仏青会議の開かれたタイ国ワイエントאיホテルには世界十九カ国の代表約六十名、地元役員学生、一般も入れて約三百名の出席者でいっぱいであった。最も若い代表は、ラオスの十二歳の男の子インドなども十代の少女少女たちを送り

込んだ。しかし、大半は三十歳から四十歳ぐらいの人が占め、会議の内容も十代には、少々難解であつたらうと思われる。中には私のように、自分自身が若い仏僧だという人もかなりいたが、ほとんどは在家の方で、熱心な仏教信者である。話も若い仏教者はどのように活動すべきかなどのテーマで熱心な討議がなされた。各国の活動状況を出し合ったのも環境、風習が違つて面白いテーマであつた。中でも注目をあつめたのが、インドの代表の発言で、「印バ戦争によってベキスター側のアメリカ軍がインドの仏教寺院を次々破壊していく」と激しく訴え、「WFBでアメリカ軍あてに抗議書をつくれ」といったような一幕もあつた。

この大会、開会前にタイ国の大僧正が亡くなつたり、首相官邸での夕食会が中止になつたりして、プログラムが多くカットされたことは残念なことであつたが五日間とも朝から夜まで熱心な研修が続き、世界の若い仏教者がお互い信頼の念をいだき、仏教の尊さを知り得たことはかけがえのない良い経験であつたと信ずる。

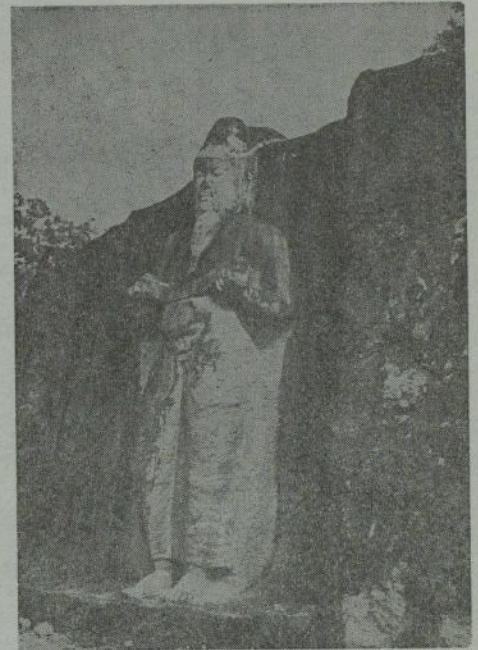
タイ国は勿論、東南アジアの諸国は仏教が第一であるが、広く大親をいただき、正法を世に流布し、世界の人々が合掌の心で生活出来るようになれば、なんと素晴らしいことか。仏教の尊い生活を著実に歩み続けていきたいものである。

(国際仏青会議オプザーバー・曹洞宗玉泉寺社会事業団)

# 第10回世界仏教徒会議 セイロン大会に参加しよう!

日数	月日(曜)	時間	発着都市名	交通機関	摘 要
1	5月21日 (日)	10:00 16:50	東京発 コロンボ着	BA/911	英国海外航空 911便でセイロンの首都コロンボへ直行 (コロンボ泊)
2	5月22日 (月)		コロンボ滞在		市内視察：ゴタミ寺院、ケラニア寺院等参拝、セイロン大菩提会訪問、博物館など市内見学のあと美しい熱帯動物園として有名なデヒウエラ動物園散策、象のサーカスなど見学 (コロンボ泊)
3	5月23日 (火)		コロンボ滞在		第10回 WFBセイロン大会開会式参列 (コッロボ泊)
4	5月24日 (水)		コロンボからウ イルバット経由 アヌラダプーラへ	バ ス	バスでコロンボ発アヌラダプーラへ、途中ウイルバット国立公園で野生熱帯動物の生態を見学 (アヌラダプーラ泊)
5	5月25日 (木)		アヌラダプーラ からシギリアへ	バ ス	セイロン古代都市の一つとして有名なアヌラダプーラの遺蹟を見学 午後バスでシギリアへ (シギリア泊)
6	5月26日 (金)		シギリアから ポロナルーワ キャンデイへ	バ ス	数々の歴史を秘める寂寥の都市シギリアとポロナルーワの遺蹟を見学して中部セイロンの湖畔の町キャンデイへ (キャンデイ泊)
7	5月27日 (土)		キャンデイから ヌワラエリアへ	バ ス	セイロン人が心のよりどころとする仏歯寺参拝、熱帯植物園を見学して後、高原保養地として有名なヌワラエリアへ (ヌワラエリア泊)
8	5月28日 (日)		ヌワラエリアから コロンボへ		セイロン茶畑の高原を楽しみながら午後バスでコロンボへ帰還、コロンボ近郊の美しいネゴンボ海岸のホテルに一泊 (ネゴンボ泊)
9	5月29日 (月)	09:00 16:30	コロンボ発 シンガポール着	SU/551	ソウィエト航空 551便でコロンボ発シンガポールへ (シンガポール泊)
10	5月30日 (火)		シンガポール 滞 在		終日、シンガポール概観、ジョホール水道など、シンガポール市内外視察 (シンガポール泊)
11	5月31日 (水)	08:30 10:05	シンガポール発 バンコック着	ML/634	マレーシア航空 634便でバンコックへ
12	6月1日 (木)	11:40 21:55	バンコック発 東京着	BA/910	早朝舟で周遊しながら南国情緒溢れる水上マーケットを視察、英国海外航空 910便で一路帰国。

(現地事情により多少変更することがあります)



第十回世界仏教徒会議は、昨年五月セイロンの首都コロンボ市で開催される予定でしたが、現地の政情不安のため一年間延期され、本年五月二十三日から開催されることとなりました。

全日本仏教会では、第一回の会議以来毎回多数の代表団を送ってまいりましたが、今回のセイロン大会にも代表団を送り、あわせてセイロン国内の仏跡を訪れて各地の寺院参拝や仏教徒と友好親善を深める機会を得たく、別項の日程によって代表団を派遣することになりました。

なにとぞ多数の方々のご参加下さいます

ようおすすめいたします。

なお定員に限りがあり、かつ日時が切迫しておりますので、満員になり次第締め切らせていただきますから、悪しからずご了承下さい。ご参加の方には本会から代表団員にご委嘱いたします。

◎旅行期間 五月二十一日から六月一日まで 十一泊十二日間

◎参加費用 金三十万円(但し渡航手続諸費用、個人的性質の費用は含まず)

◎申込締切 三月末日

◎詳細は全仏国際局宛お尋ね下さい。

昭和47年3月1日

インド流入東バキスタン  
難民救援金感謝録

(第四次分 昭和四十七年二月二十  
九日現在)  
(敬称略)

一、金貳千円 智山派安房第一教区宗務所

一、金壹万円 法華宗真門流

全仏事務局総局人事

総務局書記 榎谷淳宣 二月一日付新任

花まつり統一ポスター

全仏発行の花まつり統一ポスターは、各方面より好評を博し、特に未加盟組織の都市町村仏教会、あるいは海外開教区からも申込みを受けている。全国的に盛り上げるためにも是非ご利用頂きたい

おねがい

財団法人全日本仏教会の加盟団体に、各都道府県仏教会の加盟を推進してきましたが、各地方により仏教会の強弱があり、またこれを構成する都市仏教会、町村仏教会の況、不況があつて一様でないことは否めません。

全日本仏教会が月刊「全仏」を発行してこれらの機関に発送していますが、最近返却されるものが多くなっています。

これは新市の制定、町村合併、住居表示等の行政的な変更によるものもあり、また事務所の移転、役員員の辞任等によるものであります。当方では出来るかぎり住所変更を行なっていますが、今後左記のようにお願いいたしたいと存じます。

記

一、各都道府県の仏教会の下部組織(都市あるいは地方仏教会)の名称、住所を一覧表にして全日本仏教会宛に送付して下さい。  
一、事務所等が変更した場合(新・旧を併記して)通知して下さい。

一、各都道府県仏教会で、一括送付されても、下部に配布するために日数がかかり、二部、三部と滞って配布されることもあるなどの苦情も聞かれますので各都道府県仏教会へ一括送付を求めて希望する都市仏教会、町村仏教会へ直送することとし、若干の費用を納入して頂くこととしたいと思いますので、各都道府県の仏教会で協議され都市の仏教会へ直接送付を希望される場合は宛先の名称住所、数量等をご通知ねがいます。

☒なお、当会宛の郵便物が旧住所(築地)に配達されるものがありますので、左記に変更して下さい。

記

東京都台東区西浅草一―五―五(下川)  
財団法人 全日本仏教会 宛

日韓提携・韓国々宝を全巻刊!

高麗大藏經

影印本


- 700余年を経た、超完派の原典
- 写影であるから、一字一句誤りがない
- 全45巻、完璧な集録

ご要望に応じ、カタログをご送付します

アジア文化事業株式会社

東京都新宿区西新宿8-3-31 TEL.371-0125(代)

全仏推奨 安全焼香台 (屋内用)  
線香(ローソク)完全燃焼器 (墓地用)  
お寺を火災から守りましょう!!  
線香(ローソク)完全燃焼器。(墓地用)でお寺も檀家もみんな揃って一安心! 安全焼香台(屋内用)もあります。  
製法 実用新案特許 34188号  
製品 実用新案特許 出願受付 昭46-92325号  
ご一報下されば直ちにカタログを送付致します  
特約店募集中  
(〒460) 名古屋市中区大須三丁目39番33号

全国総発売元  合資会社 梅金商店

TEL 名古屋<052>241-0901(代)

お寺に仏旗をかがげよう

大	たて 150C-よこ 247C	¥ 4,500円	小	70C-100C	¥ 1,400円
中	90C- 135C	¥ 3,000円	手旗	35C-100C	¥ 300円

もめん 別染製 堅牢 (全日本仏教会制定意匠登録済)

各地区仏教会でまとめて御注文の際は価格の御相談に応じます。

財団法人 全日本仏教会

111 東京都台東区西浅草1-5-5

電話 03・843・6341~3

昭和四十七年三月一日発行

発行人 麻生照海

編集人 尾真人

印刷所 印刷部

発行所 財団法人

全日本仏教会